

市長賞

堺市立 月州中学校 三年

大城 正太郎

「コーヒー」杯からはじまる居場所づくり

「無敵の人」これは今、僕が読んでいる本に出てきた言葉です。それは半グレの一員として詐欺に従事してしまった人のことです。出所後、その人は銀行口座を作れなくなってしまふ場合があります。もし半グレをやめていなかった場合に銀行口座を作られてしまえば半グレの利益になってしまうからです。しかし本気で更生しようとしている人になると銀行口座を作れないという大きな問題です。更生して社会復帰をするために、就職しても、給料は手渡しにしないといけません。また色々な契約をするときに口座は必要です。そうして刑務所から出ても社会では、制裁を受け続けてしまいます。その結果、更生できずに半グレに戻ってしまう人が出てくるのです。

今までの僕は、自分から半グレに入ったのだから排除されて当然だ、と思っていました。しかし、よく考えるとただ排除するだけでは社会は明るくならないということが分かりました。本気で更生しようとし、半グレと手を切っても社会が受け入れないと結局行き場がなくなり、半グレに戻ってしまいます。失うものがな

い「無敵の人」になってしまふのです。だから社会がみんなで助け合い、それぞれの「居場所」があれば半グレに戻る必要はないな、と思わせることができるのではないのでしょうか。口座の問題の解決は僕には難しいです。しかし「居場所」のことは僕にも何かできることがあるような気がしました。

そんなときに僕の頭に浮かんだ人達があります。地域のおっちゃん、おばちゃんです。

僕は小学生の頃に子ども会に入っていました。そこでは、清掃活動をしたり、地区の中の綱引き大会やドッジボール大会に向けて練習をしたりします。そこでコーチとなってくれるのが地域のおっちゃん、おばちゃんでした。大会が近くなるとほぼ毎週練習があり、勝つためのコツを教えてくれたり、練習の面倒を見てくれたりしました。教えてもらっていた頃は何とも思いませんでしたが、今となるとすごくありがたいことをしてもらえたなと思います。

今、僕は中学生になり、防災の勉強をし防災士という資格を取

りました。せっかく勉強しているから何か活動したいと思い、地域の自主防災会に入ることになりました。防災の勉強をするまでは、そんな組織があることも知らなかったし、もちろん誰がどんな活動をしているのかも知りませんでした。

そして入ってみるとその会にいる人は、ほとんど見たことがある人でした。そう、地域のおっちゃん、おばちゃんです。子ども会のお世話になった人がたくさんいました。そこでは、地域の人が真剣に自分たちの町を守るために、もしものときにどうするかを考えてくれています。どんな防災訓練をすれば地域のためになるか、中にはバンドを組んで訓練の後に演奏会を開き、盛り上げようとしてくれる人もいます。僕も何もしていかないわけではなく、勉強をして得た知識を共有して少しでも貢献できるように努力をしています。

このように、僕の地域では地域のおっちゃん、おばちゃんが、地域をよりよくするため、社会を明るくするために活動してくれています。

僕はこうして地域の人と関わる中であるイベントを知りました。「市っちゃん喫茶」です。これは月に一度、一人暮らしの高齢者の人などが公民館に集まり、コーヒーを飲みながら話す場です。来ている人はみんな生き生きして楽しんでそうです。僕も、年をとったらここに行きたいなと思うほどです。ここでは地域の人

支え合ってみんなの「居場所」を作ってくれています。

僕はこの取り組みがもっと広まれば、社会が明るくなると思いました。

罪を犯してしまい出所しても社会に居場所がない人は少なくないと思います。罪を犯していなくても色々な事情があり居場所がない人もいるはずです。そんな人やそうではない人もみんなが気兼ねなく参加できる場が必要だと思います。「市っちゃん喫茶」のようにコーヒーを飲みながら、面白い話や最近の悩み事を言える場があれば毎日をもっと楽しくなりそうです。

私たちには、社会で生きるには必ず「居場所」が必要です。それは一度罪を犯してしまった人も同じです。僕たちの町では社会を元気にするために地域の人が様々な活動をしていています。僕はそんな地域に感謝し、自慢したいです。

